

氏 名 小谷幸子

学位（専攻分野） 博士（文学）

学位記番号 総研大甲第 1110 号

学位授与の日付 平成 20 年 3 月 19 日

学位授与の要件 文化科学 比較文化学専攻  
学位規則第 6 条第 1 項該当

学位論文題目 在米コリアンのサンフランシスコ日本町  
—マルチカルチャーのエスニックタウン—

論文審査委員 主 査 教授 庄司 博史  
教授 朝倉 敏夫  
准教授 寺田 吉孝  
教授 竹沢 泰子（京都大学）  
教授 佐野（藤田）真理子（広島大学）

## 論文内容の要旨

本研究は、サンフランシスコ日本町を事例として、米国においてジャパントウンと呼ばれる都市街区が日系商空間として日々構築されていく過程を、朝鮮半島出身の移民を中心とした在米アジア系マイノリティがそこを拠点として、いかなる生活を営んでいるのかという観点から明らかにすることを目的としている。また人類学的なフィールドワークにもとづいて、現代都市の複雑性を現実として生きる彼らの記憶や経験を基点とし、場所・空間構築過程の諸局面を切り取ることを試みるものである。

これまでのジャパントウンを舞台とする研究は、当事者の視点を重視する「日系人研究」、「日系移民研究」の枠組みのなかでおこなわれてきた。そのため、日系史の連続性を確認・継承する場所としてのジャパントウンのシンボリックな側面が強調されがちで、さまざまな文化的背景をもつ人びとの記憶や経験が重層して成立してきた場所であるという現実的な側面が具体的な記述として示される試みはほとんどなされてこなかった。それに対して、本論では、自明視されている「人・場所・文化」のあらゆる記号的相関性は、社会的に構築されたものだとする見方にもとづき、これまで注目されてこなかった日常生活の次元における「人・場所・文化」の結びつきについて、社会的構築過程としての場所、そして曖昧な社会的自己という観点を提示する。つまり、必然と有限が眼前を覆い尽くすような状況下にあるなかで、行為をともなって発揮される生活者の未知的創意性に、構築途中の状態のままに据え置かれるような場所の可能性を見出すものである。そして、このような社会的構築過程としての場所に見られる段階的、周縁的な不安定性に着目する。さらに、そのような不安定な場所における差異を、市民社会や公共性の議論に行き着く多様なアイデンティティの物語に還元させてしまわずに、生活の現場における、より複雑で不安定な「自己」と「非自己」のありように位置づける。

ここでいう「自己」とは、自分以外の人々と完全に切り離された関係ではなく、曖昧につながっているという免疫学の考えを反映したものである。すなわち、自己同一性は保たれたままで、非自己的な要素を内に取り込んで自己を再解釈していくという免疫のシステムは、今日の在米アジア系マイノリティをめぐるポストコロニアルな自己および他者観、そして隣接性構築の様相を分析するうえで示唆的である。

第2章では、在米コリアン高齢者が日本町で福祉サービスや商品を消費することによって構築していく日本町の様相を記述し、その意味について考察した。ここでは、在米コリアン高齢者の多くが米国移住前にアジア各地で日本の植民地時代を経験しており、そのような経験に起因するポストコロニアルな生活実践や社会関係が、米国の「自立した老後」をうながす福祉政策や、エスニック・コミュニティ間に存在する高齢者ニーズの受け皿の不均等性との絡みあいにおいて日常化してきたことを事例から示した。そして、それが日本町における日系高齢者福祉の現場を実態のみならず、組織的にも多文化化させることに至った過程について記述した。最後に、その多文化化の内実が日系組織側の厳しい財政事情を背景としていることについても指摘した。

第3章では、第2章でとりあげた在米コリアン高齢者を米国に呼び寄せた子どもの世代が日本町においておこなう商売に着目し、その実践から日本町が構築されていく過程をサンフランシスコ湾岸地域のコリアン系社会、および日本町の保存委員会や商店会とのかか

わりから分析した。まず、日本町がサンフランシスコ湾岸地域に暮らす移民1世を中心とした朝鮮半島出身者たちにとって、社会的に意味をもつひとつの拠点となってきたことを、コリアン系移民社会の形成過程を時間軸に沿って小規模ビジネスの地理的展開から明らかにした。次に、日本町に店舗をかまえる在米コリアン企業家の口から聞かれた「ジェペタウンはジェペタウン」という語りに着目し、日本町におけるコリアン系企業家たちのビジネス活動について明らかにした。

都市再開発事業を契機として新たな都市街区として生まれ変わって以来、日本町は多様な背景をもつアジア系の若者たちの溜まり場、出会いの場ともなってきた。第4章ではこの点に着目し、アジア系の若者文化という観点から、日本町が構築されていった過程をたどった。ここでは、「スクエア」、ボーリング場、アニメ関連スペースという3つの場に着目し、それぞれの場が若者の社交的、文化的活動とのかかわりで、いかなる時代的な文脈をもつのかについて整理し、そこから広がるマルチカルチュラルな世界について論じた。本論を通して明らかとなったことは、以下の点である。現代のグローバルな資本主義に起因する絶え間ない変動の文脈があつてこそ、日本町は日系商空間として生成、維持されてきたということ。さらに、その取り込み方は同じコリアンでも、世代やかかわりをもつ活動の内容によって文脈が異なっており、個人的側面と集団的側面の表出度合いにも違いが見られた。

一方、「ジェペタウン」に視点の軸を置きつつ、そこから翻って日本町を逆照射したときに見えてきたものもある。それは、旧日系人集住地区という言葉で表現しうる以上のものであった。換言すると、日本町が日々、変化しかたちを変えながら、日本町であり続けてきた過程としての主体生成をめぐるダイナミズムであり、ポリティクスである。そして、このダイナミズムやポリティクスに非日系の人びとが役割を与えられ、取り込まれてきたからこそ、日本町は日本町であり続けてきたのである。

## 論文の審査結果の要旨

従来、世界に点在する、いわゆる日本（人）町への関心は、日本人を主体として、その文化、社会・経済活動がいかにかまれているか、あるいはいかに保存されているかという点におかれてきた。本論文はサンフランシスコにおいて、ジャパントウンとよばれる都市空間が、日本人だけではなく、コリアン移民の生活、経済活動の場として存在している点に着目し、かれらの生活実態を明らかにすることによって、日本町がかれらにより意味づけられてきた過程を明らかにしようとする。小谷は、コリアン高齢者の日常の生活実践、企業家の商活動に関する観察調査を6年にわたって実施し、その調査資料に基づき、コリアン移民が日本町を、いかに場所・空間として構築してきたか、そして、それとのかかわりの中で、いかにかれらが自己というものを形成してきたかについて社会構築主義的な立場から考察をおこなった。

本論の第一章では、調査対象地のジャパントウンと、調査対象者であるコリアン移民に関する先行研究の動向を整理し、両者を日系商空間とのかかわりにおいて位置づける。ついで、本論の理論的・方法論的枠組みとして、社会構築主義的な観点から場所の概念、さらにそれにかかわる主体の「曖昧な社会自己」を捉えるために、免疫学から導入した「自己」と「非自己」の概念を提示する。第二章では、日本町に生活するコリアン高齢者に焦点を当てる。かれらが、米国の自立した老後を促す福祉政策とのかかわりの中で、日本植民地時代に身に付けた日本語能力と経験を基に、日本町を自らの生活の場と転化し、日系の受け入れ組織を多文化化してきた経緯を考察する。第三章においては、コリアン高齢者を呼び寄せた子どもの世代が、企業家として日本町において幅広くビジネスを展開してきた過程を、周辺のコリアン社会、日本町保存委員会や日系商店とのかかわりから分析する。小谷はある韓国人企業家の「ジェパントウンはジェパントウン」という韓国語の発話の中に、実質的にはコリアタウン化しつつある都市空間において、あくまでジャパントウンの枠内にとどまろうとする経営戦略を読み取ろうとする。第四章では、1960年代以降、都市再開発事業のなかで日本町がアジア系の若者たちの溜まり場、文化・社会活動の場として取り込まれ、マルチカルチュラルな空間へ変遷してきたことに着目し考察を加えた。具体的には、「スクエア」「ボーリング場」「アニメ関連スペース」をとりあげ、これらが、マルチカルチュラルなネットワークを創出する拠点となってきたと指摘する。終章において、小谷はまず、日本町が日系商空間として生成維持されてきたのは、グローバルな資本主義に起因する絶え間のない変動の文脈があってこそであり、その文脈はそれにかかわる様々な主体の世代や活動の内容によって常に異なってきたと主張する。そして、これが可能であったのは、コリアンはじめ非日系の人々が、ダイナミズムとポリティックスの中でその主体生成と役割を獲得し、自らに取り込んできたからであると結論づける。

本論文は、日本では、もっぱらエスニックなシンボリック空間として関心の対象であった日本（人）町を、他のエスニック集団の活動空間、あるいはマルチエスニックな場として論じようとしたユニークな着眼点が最も高く評価された。小谷は長期にわたるコリアン社会の調査においてコリアン高齢者等と緊密な関係を構築し、臨場感のある生活実態を描出しつつ、その過程でかれらにとっての日本町の持つ意味を結果としてではなく、プロセスとしてとらえる可能性を提示した。またコリアン移民史の観点からみて、従来、移民世

代に偏りがちであった分析枠に、高齢者、ビジネスマンという新たな枠概念が提示されたことも今後の研究への貢献が期待される。

一方で、いくつかの課題も指摘される。全般として、コリアン高齢者に関する記述が大半をしめ、後半のマルチカルチュラルな空間に関する考察は実証的なデータがやや薄い印象がある。これと関連して、移民国家の都市が元来マルチカルチュラルな空間である中で、これをサンフランシスコの日本町の特徴としてあげることの妥当性も検証が必要であろう。また、理論枠として提示された「自己」「非自己」の概念を用いたデータの考察が多少表面的に終わった感は否めない。

とはいえ、日本においては、いわゆる排他的エスニック空間として捉えられがちな日本町研究に斬新な視点を持ちこみ、コリアンを中心とするマルチエスニックな活動空間であったということを明らかにした本論文の意義を損なうものではない。今後この分野における本人の研究のさらなる発展への可能性を内包した本論文は総合的に判断して、博士論文として価値があるとみとめられた。